

日本語引用表現の分類試案

小野正樹（筑波大学）

要 旨

日本語の引用研究では「報告」と「再現」に主眼が置かれたが、再現の中でも話者・聴者の関係や、引用形式の機能・用法についてはまだ十分になされていない。本研究では、異なる言語を対照する手段としても有効な引用研究として、3種類の分類を提案する（例として日本語を示す）。

- I) 発信者中心構造：A が B に・・・と言った。
- II) 受信者中心構造：B は A から・・・聞いた。
- III) イベント中心構造：・・・そうです。

用法分析に当たっては、Chafe（1994）で指摘された遠隔化されたイベントと、近接的なイベントという考えを用いた。I) 発信者中心構造が、日本語では基本であることを述べる。II)、III) の構造では、I) に対して、情報の操作（前提化や、言語の言い換え）などの用法が認められることを主張する。

キーワード：証拠性、伝聞「そうだ」、遠隔イベント、近接イベント、前提

1. 問題の所在

日本語の引用研究には、引用構文の特質を追究した藤田（2000）、「と」に注目して引用構造を見た砂川（1988）、直接引用／準直接引用／準間接引用／間接引用といった引用の分類を行った鎌田（2000）、ディスコースでの引用の機能を見た山口（2009）等の研究が挙げられる。こうした研究では「報告」と「再現」に主眼が置かれたが、再現の中でも話者・聴者の関係や、引用形式の機能についてはまだ十分になされていない。例として、「先生と約束したが、その先生が約束時間に現れなかった」状況を考えてみたい。記号「#」は構文的には成立しても、発話状況で不適切なことを示す。

- (1) 約束した時間に不在であった先生に対して
 - a #先生は今日来るとおっしゃいましたが、
 - b 先生は今日いらっしゃると伺いましたが、

（山岡・牧原・小野（2010））

(1a) では「先生」が「今日来る」と発話したことを言質にし、〈発信者〉の「先生」を詰問する形式となってしまう。それに対し、(1b) では詰問ではなく、話者もその約束が正確だったかを自問していることを含意しての発話となっているため、〈発信者〉へのフェイス脅かし行為（Face-Threatening Act：以下 FTA）が緩和されると考えられる。本研究では、話者と聴者という関係と、引用原点の主体を〈発信者〉、受け手を〈受信者〉と区別して、語用論としての引用研究を述べる。

2. 本研究の2つの考え方

2. 1. 証拠性とポライトネス

引用とは何かを考えるにあたり、Chafe and Nichols (1986) の提唱する「証拠性」(Evidentiality) という考え方を紹介したい。Chafe and Nichols (1986:261-272) は、言語処理過程から「証拠性」を4つに分けている。表は矢印の左側のものが活動の根拠になり、矢印の右側がその根拠をもとに行う活動である。

表1 Chafe and Nichols (1986) 証拠性の分類

	根拠となるもの		言語主体の関わり方
i	?	→	belief (信念)
ii	evidence (証拠)	→	induction (帰納的推論)
iii	language (言語)	→	hearsay (聞き伝え知識)
iv	hypothesis (仮説)	→	deduction (演繹的推論)

根拠となるものが未知または不明確なものは信念であり、証拠があれば帰納的推論となる。また、言語で情報を得た場合には聞き伝え知識として処理され、仮説があれば、演繹的推論となる。なお、本研究では「聞き伝え知識」は引用に相当すると考える。引用形式を思考動詞と対比して見ると、この4分類のうち思考動詞が表せる範疇は聞き伝え知識以外のもので、「聞き伝え知識」が思考とは異なる範疇なことがわかる。ここで、引用形式の「そうだ」と日本語の代表的思考動詞の「思う」を比較する。

(2) 彼女は来るそうだ。

(3) (私は) 彼女は来ると思う。

(2) は「そうだ」が hearsay (聞き伝え知識) の証拠性を表すが、(3) の「思う」では、信念、帰納的推論、演繹的推論の証拠性を表すことができる。hearsay (聞き伝え知識) の本質として、他者の情報をあくまでも他者のものとして捉え、発話するということが、この範疇である。そのため、情報内容に対する自者の真偽判断は、真であろうと偽であろうと可能である。hearsay (聞き伝え知識)、言い換えれば、引用しているという証拠性を表し、情報と主体の関わりを明示化するものである。一方で、どの主体、あるいは立場から伝えればいいのかということは、(1) で見たように言語生活において大きな要因であり、これがポライトネス研究、ひいては配慮表現研究の課題である。

2. 2. 引用の構造3種類

本研究では直接語法・間接語法という考えではなく、話者と聴者、〈発信者〉と〈受信者〉といった主体に注目し、引用文の構造をモデル化する。以下では、〈発信者〉、〈受信者〉、{イベント} という用語を用いるが、〈発信者〉と〈受信者〉は、その文の話者や聴者ではなく、引用原点の主体である。発信者中心構造の言語形式には「と言った」「だって」、受信者中心構造には「と聞いた」、イベント中心構造には「そうだ」の形式がある。

表 2 引用構造の形式的分類

I	発信者中心構造	〈発信者〉が〈受信者〉に{イベント}と言った。 例) 彼が私に彼女が結婚すると言いました。
II	受信者中心構造	〈受信者〉が〈発信者〉から{イベント}と聞いた。 例) 私が彼から彼女が結婚すると聞きました。
III	イベント中心構造	〈発信者によると〉 ^{省略可能} {イベント}そうだ。 例) (彼によると) 彼女が結婚するそうです。

2.2.1. 発信者中心構造

発信者中心構造は誰が言ったかが、必ず明示されるものである。

(4) 彼女がピアノを弾くと言った。

(5) 彼女がピアノを弾くと聞いた。

日本語はいわゆる“主語”が文脈により規定される。(4)(5)を較べると、(5)では「聞いた」主体が発話者との解釈できるが、(4)では発話者の解釈はできずに、「彼女」が発話者となる。このように、主語の明示性が必須ではない日本語でも、発信者中心構造においては必ず述べられるものである。この構造では、受信者が話者である場合、あるいは、不特定者の場合には非明示であることも許される。

(6) 彼女が私に来ると言った。

(7) 彼女が来ると言った。

(6)では「私に」は必ずしも必要ではなく、(7)の場合には誰に伝えたのかが表されていなくても、構文的には成立する。この文タイプの動詞には、「伝える」「話す」「述べる」「おっしゃる」等がある。

2.2.2. 受信者中心構造

受信者中心構造は〈受信者〉が非明示的な場合には通常第1人称主体と解釈される。

(8) 彼女がピアノを弾くと聞いた。

〈発信者〉を明示するには、二格「彼に」カラ格「彼から」が共起される。また、〈受信者〉には人称制限がある。

(9) *あなたは先生から彼女がピアノを弾くと聞いた。

(10) *彼は先生から彼女がピアノを弾くと聞いた。

2人称、3人称主体では非文法的である。この文タイプの動詞には、「うかがう」等がある。また、受身文でもこの構造は見られる。

(11) 先生から彼女がピアノを弾くと言われた。

2.2.3 イベント中心構造

従来モダリティの伝達として扱われてきたものを、引用研究の枠組みで考えるものは管見の限り少ないが、言語機能の側面から考えると、引用機能を果たす。

(12) 彼女がピアノを弾くそうです。

このタイプは、「新聞によると」「ニュースによると」のように、日本語では人間主体以外

のものが〈発信者〉となることが多い。人間でも、〈発信者〉が必ずしも明示化されなくてもよく、(彼によると)は必須成分ではない。

(13) (彼によると) 彼女がピアノを弾くそうです。

2.2.4. 「って」について

「って」については、発信者中心構造とイベント中心構造の2種類がある。〈発信者〉が明示されている場合には、発信者中心構造となる。

(14) 彼が、彼女がピアノを弾くって。

しかしながら、必ずしも明示しなくてもよく、イベント中心構造を取ることもある。

(15) 彼女がピアノを弾くって。

3. 3構造の機能的異なり

3.1. 共起制限

この3タイプの違いを図るテストとして、副詞や文末表現との共起を見る。副詞「絶対」が何を強めているというテストを行う。「絶対」という副詞は工藤(1982)では確信を表す副詞とされ、「きっと」「必ず」等が同範疇とされている。以下《 》の語彙は{ }を修飾していることを示す。

(16) 《絶対》{彼女が結婚する}。

(16)では副詞「絶対」が「彼女が結婚する」という命題を修飾し、「彼女が結婚する」ことへの強い確信の表明である。ところが、引用節を伴った発信者中心構造の(17)では「言いました」を修飾しよう。この現象は、受信者中心構造の(18)でも同様である。

(17) 《絶対》{彼は}私に彼女が結婚すると言いました。

(18) 《絶対》私は{彼から}彼女が結婚すると聞きました。

しかしながら、(19)のイベント中心構造においては命題修飾の解釈しか許さない。

(19) 《絶対》{彼女が結婚する}そうです。

「絶対」はモダリティ性の高い副詞であるという指摘は、杉村(2009)でもされており、話者の強い主観性を表す。(19)のみ異なる解釈となる理由を考えると、引用形式と主観性は異なるレベルのものと言えよう。

次に、文末形式として蓋然性を表す「だろう」、可能性を表す「かもしれない」との共起を観察すると、「だろう」との共起は起こらないことも副詞「共起」とのテスト結果の解釈を強めることになる。「だろう」と「かもしれない」の違いについては、「かもしれない」は話し手が発話時に2つの思考内容を表すことができ、「Aかもしれないし、Bかもしれない」と言えるが、「だろう」では言えないとされている(宮島・仁田(1995:198))。記号「*」は非文法的なことを表す。

(20) 泊まるかもしれないし、泊まらないかもしれない。どっちにしても相当おそくなる。

(21) *泊まるだろうし、泊まらないだろう。

(宮島・仁田(1995:198))

(22) 彼は私に彼女が結婚すると言った《*だろう》。

(23) 私は彼から彼女が結婚すると聞いた《*だろう》。

(24) 彼女が結婚するそう《*だろう》。

しかしながら、発話時に複数の思考を持ち得る可能性「かもしれない」では、発信者中心構造および受信者中心構造が共起できる。

(25) 彼は私に彼女が結婚すると言った《かもしれない》。

(26) 私は彼から彼女が結婚すると聞いた《かもしれない》。

(27) 彼女が結婚するそう《*かもしれない》。

これは Chafe and Nichols の指摘のように、「だろう」の表す induction (帰納的推論) と hearsay (聞き伝え知識) の異なる 2 つの証拠性が一文内に存在することはできないためである。

【考察 1】 イベント中心構造：

言語主体が明示されない特徴を持ちながら、他の 2 つの構造とは性質を異にする。

3.2. 第 1 言語の習得状況観察

第 1 言語の初期の習得過程では、発信者中心構造で語り始めるようである。

(28) ミッフィーちゃんがおいしいって言ってたよ。(3才1ヶ月)

(2011年5月1日 さいたま市で収録)

『ミッフィー』という子ども向けのテレビのアニメ番組を見ていた3歳児が、テレビの発話内容を第三者に伝えた際の発話である。この3歳児の会話を観察すると、発信者中心構造で述べる発話は非常に多いのだが、受信者中心構造が見られない。同様の指摘が、大久保 (1967) の縦断的研究にも見られる (杉浦 (2002) には詳細な引用がある)。

(29) なあーにって (1歳6ヶ月)

(30) あしたおまつり行くんだからだって (1歳10ヶ月)

大久保の調査では、習得の初期段階では、「って」、その後「だって」が見られると述べている。

また、成人を対象としたデータを観察する (名大会話コーパス)。このデータでは発信者中心構造で、「言う」が 1436 件、受信者中心構造の「聞く」10 件、受身形の「言われる」が 364 件と、日常談話では大きな違いが見られる。

(31) : W 先生は OK って言ったんだよね (うん)。

1399 [1] M007

(32) : すごい驚いてて、そいで君たちは D に襲われるっていう恐怖はないのかって
聞くからさー、えーないですっていうか、D さんの方がうちらに襲われるんじや
ないかと思ってびびってましたって。

10 [1] F094

ちなみに、イベント中心構造「そうだ」は 4 件と、非常に少ないことがわかった。

(33) : 全部で 62 名泊まれるそうですよ。

3480 [1] M027

コーパスの頻度調査から、発話者中心構造が受信者中心構造、イベント中心構造より一般

的な形式と考える。

【考察 2】 発信者中心構造：

3つの構造の中で、発信者中心構造が自然な、言い換えれば一般的な引用形式である。

3.3. 引用表現の観察

では、なぜ受信者中心構造が少ないのかを考えると、日本語受信者構造では、発信者に人称制限がある。(33)では発信者が第1人称の場合のみ許容できる。

(34) a 私は彼女に愛していると言った。

b *彼女は私から愛していると聞いた。

(発信者)、(受信者)ともに3人称の「彼」「彼女」ならば、上記制約はない。

(35) 彼女は彼から愛していると聞いた。

同様に、前置き表現としても一人称では不自然である。

(36) a*僕から聞いたかも知れないけど。

b 彼から聞いたかも知れないけど。

この分析には、廣瀬(2010)の指摘する私的表現/公的表現が有効である。引用内容が話者の心的内容である場合に、受信者構造の3人称は不自然である。

(37) a 私は彼女に愛しているとよと言った。

b *彼女は私から愛しているとよと聞いた。

発信者が一人称主体の場合には、受信者構造ではなく発信者構造が用いられるように、制約が多いことが特徴である。

【考察 3】 受信者中心構造の特徴：

私的表現が取り込めないこと、(発信者)に一人称を取れないことなど、公的表現の性格が多い。

3.4. 引用内容からの分析

発信者中心構造が一般的な用法とすると、他の2つの用法では、異なる文脈効果があるのではないか。3歳児の発話には、被引用の《イベント》が直前であることが多く、これをイベント中心で述べるのである。

(38) 携帯電話？ テレビのリモコン？ いえいえ、これは電卓です！（中略）縦 16.2 × 横 3.2 × 厚さ 1.2 cm とスリムだから、携帯電話みたいに片手で持って数字入力できるんだって。

(2011/05/12, 朝日新聞 夕刊, 6 ページ)

(39) #携帯電話みたいに片手で持って数字入力できると言います。

両者の違いを説明するために、Chafe (1994) で指摘された遠隔化された (displaced) イベントと、近接的な (immediate) イベントという考えを用いたい。この考え方は mode

(様態)に関わるもので、主体が空間や時間をどのように捉えているかという考えである。発信者中心構造でも、「だって」形式の方が近接的な(immediate)イベントとして捉えている。

【考察4】 イベント中心構造「って」の特徴：
近接的な(immediate)出来事を{イベント}とする。

一方、受信者中心構造で、多く見られる特色として、〈発信者〉から《イベント》の情報を得た後、時間を経て(displaced)、質問形式として用いるものがある。

(40) 消費税の仕入れ税額控除の適用を受けるためには、帳簿の記載や保存が必要と聞きましたが教えてください。

(2009/10/06, 愛媛新聞)

前提とは主張の対概念で、話者は聴者に対してそれを真として伝えるものである。上記例ではイベントを前提として、質問を行っている。

【考察5】 受信者中心構造の特徴：
受信情報を前提とした質問形式となっている。

では、イベント中心構造にはどのような傾向のものが見られるだろうか。

(41) 知人のオランダ人が私に話してくれました。彼の奥さんが病気で余命わずかとなり、痛みに悩まされ、やっとのことで安楽死を認める証明書を得たそうです。そうして、旅立つと決めた日の朝、彼女は愛する夫のために朝食を作り、夫と最後の別れをきちんと済ませ、あの世に旅立っていったそうです。

(2011/03/01, 週刊エコノミスト, 48?51 ページ)

(42) 外国映画の名作を週替わりで上映する「午前十時の映画祭」が人気を集めています。昨年2月から23都道府県の25劇場で始まった1年目は約59万人を動員したそうです。私も毎週月曜日、バスで長崎市の映画館に通っています。

(2011/02/22, 大阪読売新聞 朝刊, 22 ページ)

イベント中心構造の特徴は〈発信者〉を明示化しないことだが、そのため〈発信者〉に証拠性を求めない。発信者が伝える遠隔化された(displaced){イベント}が真であるかを話者はコミットしないのである。

【考察6】 「そうだ」形式のイベント中心構造の特徴：
遠隔化された(displaced){イベント}について、話者はコミットしない発話態度となっている。

4. まとめ

表 3 引用構造の機能的分類

<p>I 発信者中心構造 〈発信者〉が〈受信者〉に {イベント} と言いました。 例) 彼は私に彼女が結婚すると言いました。</p>	<p>基本的用法</p>
<p>II 受信者中心構造 〈受信者〉は〈発信者〉から {イベント} と聞きました。 例) 私は彼から彼女が結婚すると聞きました。</p>	<p>〈受信者〉に人称制約があり、遠隔化された {イベント} を前提化する</p>
<p>III イベント中心構造 {イベント} そうです 例) 彼女が結婚するそうです。</p>	<p>1) 近接的な (immediate) 出来事を {イベント} とする。 2) 遠隔化された {イベント} について真偽のコミットしない</p>

主要参考文献

- 大久保愛 (1967) 『幼児言語の発達』東京堂
- 小野正樹 (近刊) 「思考動詞の主観性」 澤田治美編『ひつじ意味論講座 第5巻 主観性と主体性』ひつじ書房
- 加藤陽子 (2010) 『話し言葉における引用表現 引用標識に注目して』くろしお出版
- 鎌田修 (2000) 『日本語の引用』ひつじ書房
- 工藤浩 (1982) 「叙法副詞の意味と機能」、国立国語研究所『研究報告集 3』
- 砂川有里子 (1988) 「引用文における場の二重性について」、『日本語学』7-9 明治書院 14-29
- 杉浦まそみ子 (2002) 「日本語の引用表現研究の概観：習得研究にむけて (第1章 文法形式と機能の習得と使用)」『言語文化と日本語教育. 増刊特集号, 第二言語習得・教育の研究最前線：あすの日本語教育への道しるべ』120-135
- 杉村泰 (2009) 『現代日本語における蓋然性を表すモダリティ副詞の研究』ひつじ書房
- 廣瀬幸生 (2010) 『日本語から見た日本人—主体性の言語学』開拓社
- 藤田保幸 (2000) 『国語引用構文の研究』和泉書院
- 藤田保幸 (2003) 「伝聞研究のこれまでとこれから」『言語』32-7、大修館書店 15-23
- 宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法 (上)』くろしお出版
- 山口治彦 (2009) 『明晰な引用, しなやかな引用 話法の日英対照研究』くろしお出版
- 山岡政紀・牧原功・小野正樹 (2010) 『コミュニケーションと配慮表現—日本語語用論入門』明治書院
- Chafe, Wallace and Johanna, Nicols (eds.) . (1986) *Evidentiality: The Linguistic Coding of Epistemology*. Norwood, New Jersey: Ablex Publishing Company.
- Chafe, Wallace (1994) *Discourse, Consciousness, and Time: The Flow and Displacement of Conscious Experience in Speaking and Writing*. Chicago: The University of Chicago Press.

(小野正樹、筑波大学人文社会科学部研究科准教授、ono.masaki.ga@u.tsukuba.ac.jp)